

砂川闘争における「流血の砂川」と《赤とんぼ》の歴史的記憶

梶 大也

1955年の基地拡張計画に端を発する砂川闘争では、参加者が多くの労働歌や童謡、唱歌を歌った。特に有名なのは、1956年10月13日、「流血の砂川」と呼ばれるデモ隊と警官隊との衝突の際に歌われた山田耕筰の《赤とんぼ》である。

本稿の目的は、砂川闘争、特に「流血の砂川」をめぐる語りのなかで《赤とんぼ》がどのように説明され、意味づけられてきたかの歴史的記憶を明らかにすることである。そのために、まず、関連する先行研究を確認し、本稿の視座を提示する。次に、砂川闘争において何がどう歌われていたかを明らかにするため、中学生の文集、雑誌、新聞記事を検討する。最後に、砂川闘争や「流血の砂川」を過去の事象として振り返るなかで何がどう重視されてきたかを明らかにするため、闘争の記憶に関する様々なメディアとして、ルポルタージュ小説、闘争参加者の回想や児童書を対象とする。

砂川闘争を同時代的に伝える文集や雑誌記事では労働歌が多く言及された。一方で、《赤とんぼ》は「流血の砂川」に関する記述にのみ見られた。《赤とんぼ》と「流血の砂川」との関係や、同曲の感情的な効果は砂川闘争以後のルポルタージュ小説や回想でも見られた。そこでの《赤とんぼ》の言及回数は《民独》のそれを上回っていった。なかには《赤とんぼ》が「流血の砂川」で警官隊に与えた影響に疑義を挟む者もいたが、この曲は1960年代の安保闘争のような他の政治運動でも歌われ続けた。加えて、児童書において「流血の砂川」の《赤とんぼ》は、衝突に対する平穏、郷土、平和を表した。この結果は、戦後の政治運動の一齣における音楽の役割の理解と、他の政治運動の事例研究の展開に資するものである。